

早稲田大學圖書館藏『空際格致』について

——版本及びその價值——

陳 廣 宏

早稲田大學圖書館貴重書庫に所藏されている明代高一志の撰『空際格致』二卷は、同館の藏書検索 WINE OPAC には次のように著録されている。

請求記號：ニ 07・02288

出版書寫事項：[出版年不明]、[出版者不明]、[出版地不明]

形態：2 冊；26cm

訂：韓雲 閱：陳所性 卷下の訂：畢方濟、伏若 望卷下の准：陽瑪諾
蟲損あり

唐裝

印記：蕉霽亭、和久正辰

ここにある「唐裝」は、「和裝」と區別して記したもののだろう。このテキストは原裝ではなく朝鮮裝である。より詳しい書誌は以下の通りである。

每半葉九行、每行二十字、四周單邊、白口、魚尾は無い。字體は萬曆刻本の横輕豎重の宋體に近く、また字體がやや長い（卷下に最も特徴が現れる）。

上册（封面顔體楷書「空際格致 乾」）の目錄首頁の右上角に「早稲田大學圖書」陽文方印があり、封面空白頁の左下角に「昭和二七年四月二八日購求」という長方登録印（印中の數字は墨書書き入れ）がある。

正文首頁「空際格致卷上」標題下署：

極西耶穌會士高一志撰

古絳後學韓 雲訂

南絳後學陳所性閱

右下角には「蕉霽亭」の小方陽文印がある。

卷末には「四行情圖」を附す。

封底には「和久正辰」半陽半陰の圓印がある。

下册（封面顔體楷書「空際格致 坤」）の目録首頁の右上角には「早稻田大學圖書」陽文方印がある。封面空白頁左下角には「昭和二七年四月二八日購求」の長方登録印（印中の數字は墨書書入れ）がある。

目録の後の一葉には次のように題されている。

遵教規凡譯經典諸書必三次看詳方允附梓茲並

鐫訂閱姓氏於後

耶穌會中同學	畢方濟	共訂
	伏若望	
值會	陽瑪諾	准

正文の首頁にある「空際格致下」標題の下には次のような署名がある。

極西耶穌會士高一志撰

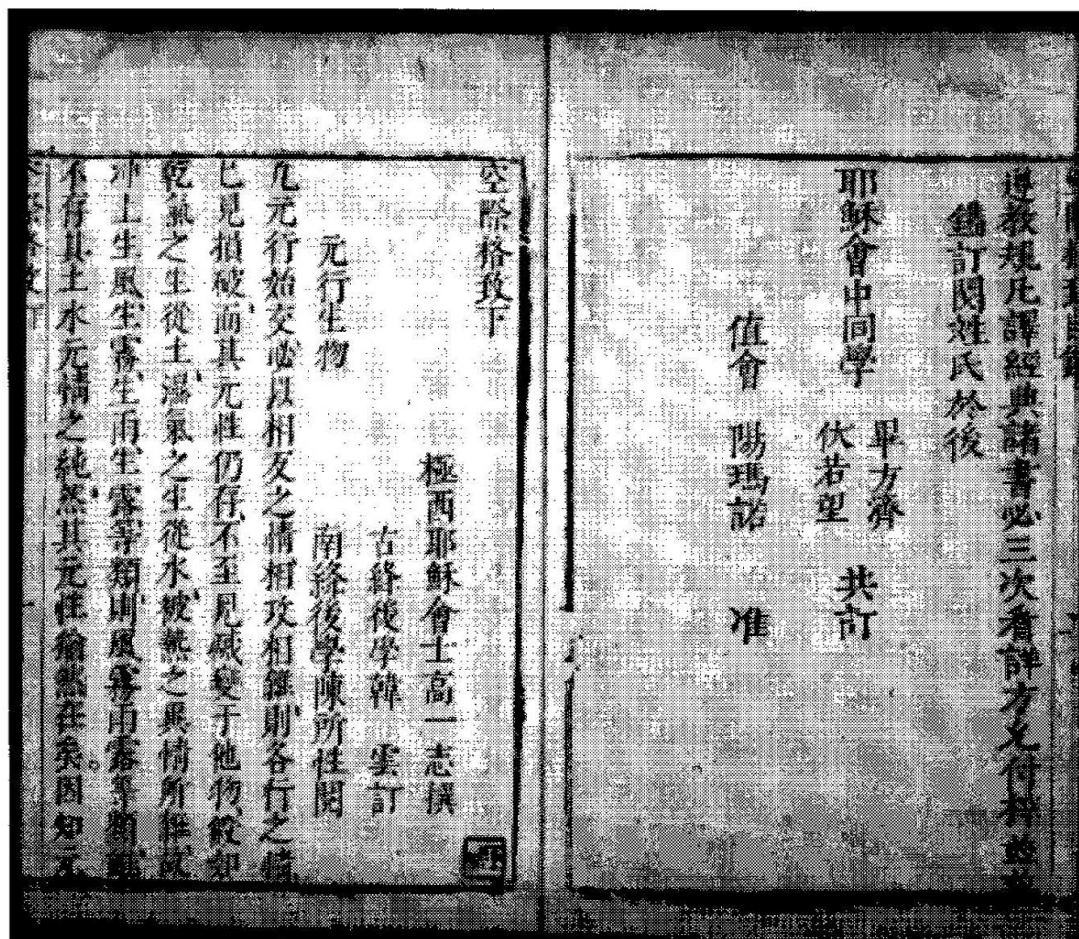
古絳後學韓 雲訂

南絳後學陳所性閱

右下角には小方陽文印「蕉霽亭」があり、封底には「和久正辰」の半陽半陰圓印がある。

—

高一志 (Alfonso Vagnoni) 字は則聖、もとは王豐肅、字を一元、またの字を泰穩と名乗った、イタリアの宣教師である。1566年、トリノ教區のトロファレツロに生まれ、1584年にはイエズス會に入會し、養成を受けたのち、五年間、古典學や脩辭學を教授した。その後、ミラノで三年間、哲學を教授した。1603年、神父數名と共にアジアへ渡り、1605年、布教のため南京に派遣された。中國を訪れた初めの四年間は、中國の言葉と文字の習得に努めた。1611年5月には南京に第一教堂を建てた。1616年5月、南禮部侍郎の沈灌が宣教師の追放を上疏すると、徐光啓、李之藻、楊廷筠、孫元化などは宣教師を救う上疏を行ったが、結局、高一志は投獄され、翌年にはマカオに送還された。1624年、山西の絳州を布教のために訪れて、名前を高一志と改め、韓雲兄弟、段袞といった人々と親しく交わり、彼らの援助を得た。後に蒲州を訪れて布教を



早稲田大學圖書館藏『空際格致』

行った。閑暇の際には漢文の書籍を編纂した。1640年4月19日、絳州にて没した¹⁾。

高一志の著述について、最も早くは韓霖・張賡の『聖教信證』(1647)に見えており²⁾、『西學脩身』(十卷)、『西學齊家』(五卷)、『西學治平』、『四末論』(四卷)、『聖母行實』(三卷)、『聖人行實』(七卷)、『則聖十篇』、『十慰』、『斐錄彙答』(二卷)、『勵學古言』、『童幼教育』(二卷)、『譬學』、『空際格致』(二卷)、『寰宇始末』(二卷)、『教要解畧』(二卷)の十五種が記されている。同治年間の胡璜『道學家傳』二(1865)³⁾にも十五種が記されているが、ここに『勵學古言』は見えず、『神鬼正記』が見える。費賴之〔Louis Pfister、(佛)ルイ・フィスター〕の『在華耶穌會士列傳及書目』(1868～1875)は高一志の遺作二十三種を列挙しており、『一六一六年中國年報』、1624年と1606年から1607年までの書簡、マテイオリッチの『教義綱領』に四つの注を附したものの、そして上述した十六種の著述、『終末之記甚利於精脩』(全六頁、柏應理神甫〔Philippe Couplet、(白)フィリップ・クプレ神父〕『四末眞論』の後に附されている)、『達道紀言』一卷、

『推驗正道論』一卷が加えられている⁴⁾。

高一志のこれらの著述は、大部分が山西での布教期間中に刊刻された。上述した費頼之の記載によると、『教要解畧』は1626年、絳州において初めて刊刻され、『聖母行實』は1631年に絳州で刊刻された。『聖人行實』は1629年に絳州で刊刻された⁵⁾。『則聖十篇』は1626年より後、福州で刊刻された。『十慰』は絳州で刊刻された。『西學脩身』は1630年に絳州で刊刻された⁶⁾。『童幼教育』は1620年の刻本である⁷⁾。『神鬼正紀』は1633年頃に絳州などの地で刊刻された⁸⁾。『勵學古言』には「明崇禎五年夏至譯完、立秋刻完」⁹⁾という刊語があり、1632年の刻本だとわかる。『達道紀言』には韓雲による崇禎九年(1636)の序¹⁰⁾があり、『譬學』には韓霖の崇禎癸酉(1633)の序¹¹⁾があるため、それぞれ序の記された頃に刊行されたに違いない。

『空際格致』は、主にアリストテレスの四元素説を論じた書物である。方豪『中國天主教史人物傳』によると、アリストテレスの學説は、ポルトガルのコインブラ(Coimbra)にあるイエズス會の大學での講義において漢文翻譯され、1624年に畢方濟[Francesco Sambiasi、(伊)フランシスコ・サンビアシ]が翻譯した『靈言蠡勺』、1628年に傅汎際[Francisco Furtado、(葡)フランシスコ・ファータド]と李之藻が共譯した『寰有詮』、1631年に畢方濟と李之藻が共譯した『名理探』がある。1631～1640年に高一志が翻譯した『脩身西學』は、『論靈魂』、『論天』、『邏輯學』と『尼各馬可倫理學』の評注本とに分かれている¹²⁾。裴化行の考訂によると、高一志の『空際格致』も、コインブラ大學においてアリストテレスの自然哲學を講じたラテン語の著作を編譯したもの¹³⁾であり、『天象學』の評注本である。コインブラ大學のアリストテレス哲學課程の講義は、ヨーロッパのイエズス會内部の神學體系を變革していく目論みや、その過程などを反映しているが、これと同時に、宣教師に神學教理を伝えさせ、古代ギリシャの諸科學の知識と理念とをもたらず契機にもなった。

『空際格致』の刊刻時期について、徐宗澤は、高一志が絳州で布教していた頃に刊刻されたもので、「故此書刊印在一六二四年後也」〔従ってこの書の印刷は1624年より後に出版された〕¹⁴⁾と推測している。『李儼、錢寶琮科學史全集』第七卷の『明清之際西算輸入中國年表』は、高一志『寰宇始末』二卷、『空際格致』二卷の翻譯年代を崇禎二年己巳(1629)¹⁵⁾としており、『徐家匯藏書樓天主

教文獻目録』¹⁶⁾は刊行年を1633年としている。高一志の他の著作の刊刻状況や、刊刻に関わった多数の人々との関係を照合すると、『空際格致』の刊刻年代は推測の通り1624年以後、1633年までの間である可能性が高い。さらに言えば、韓霖が序を撰した順治四年(1647)の『聖教信證』には、すでに『空際格致』が著録されている。

まず、この書の校閲者について述べる。一人目は韓雲、字は景伯、絳縣の人である。萬曆壬子の科擧に第七位で合格した。徐州知州となり、後に漢中府推官に改められたが、再び葭州知州に任ぜられた。著作には『武徳内外編』、『勞人草農書』などがあり、康熙『絳州志』卷二に詳しい傳が見える。韓雲やその弟の韓霖たちはキリスト教、洋學に深く通じ¹⁷⁾、高一志が絳州において布教し、著述した際、高一志を大いに支えた。『空際格致』以外にも、高氏の『達道紀言』は韓雲が編纂して序を記したものであり、『寰宇始末』にも韓雲などが「同に修潤」したとある。また『童幼教育』は韓霖と絳州の士人である段袞が校閲し、韓霖が序を撰しており、『神鬼正紀』も段袞と韓霖が校訂している。『西學脩身』は衛斗樞、段袞、韓霖が校訂しており、『譬學』は段袞、韓垵、韓霖が校閲し、韓霖が序を撰している。康熙『絳州志』の「韓霖」傳には、韓霖がかつて「銃法を高則聖に學んだ」¹⁸⁾とある。

もう一人の校閲者である陳所性は絳縣の人である。崇禎元年(1628)、恩貢により貢生に選ばれた。順治『絳縣志』五卷には、趙士弘の修、陳所性等の纂とあり(順治十六年刻本)、父、弟ともに傳が立てられている¹⁹⁾。羅雅谷〔Giacomo Rho、(伊) ジャコモ=ロー〕『籌算』(崇禎元年刻本)には「脩政曆法極西耶穌會士羅雅谷撰 湯若望〔Adam Joannes、(獨) アダム=シャル〕訂」と署名され、「門人朱國壽、陳所性、黃宏憲、孫嗣烈、焦應旭受法」とあることから、陳所性もキリスト教や洋學に通じていたことがわかる。『空際格致』のほか、高氏の『天主聖教四末論』には「南絳居士陳所性閱」とあり、『勵學古言』には「南絳後學陳所性全較」とある。これらのことから、『空際格致』も絳州で刻された可能性が高い。

また、費頼之の記述によると、イエズス會における高一志の同僚には、まず畢方濟(François Sambiasi、1582～1649)がいた。畢方濟、字は今梁、イタリアのイエズス會士である。1610年、マカオに至り、1613年には北京に召し出さ

れ、1616年、南京での教難により、南方に追放された。1622年には上海に至り、1628年、松江で病に罹ったため、山西に派遣される。その途上、河南の開封に至り、開封で数年間布教を行った。その後、山東を廻り、再び南京に至った。1638年、南京から淮安に至り、1641年には南京において教會を建て、1644年までは揚州、蘇州、寧波の諸府で布教を行った。清兵が北京を占領すると、弘光帝の使節としてマカオに赴き、隆武帝が福州で皇帝に即位すると、福州に召しだされた。桂王の時には廣州に教會を建設して布教を行い、1649年までには没したようである。遺作には『靈言蠡勺』二卷、『睡畫二答』などがある。

もう一人の同僚は伏若望 (Jean Froes, 1590～1638) [ジャン・フロエス]、字は定源、ポルトガルのイエズス會士である。1624年、羅雅谷と共に中國に入った。初め杭州に派遣され言語を學んだ。生涯のほとんどを杭州で過ごし一生を終えたようで、杭州以外では、江南、浙江兩省を頻繁に訪れ、この地域の城鎮で布教を行った。遺作には『助善終經』、『五傷經禮規程』、『苦難禱文』などがある。

高一志の同僚には、さらに陽瑪諾 (Emmanuel Diaz Junior, 1574～1659) [マヌエル・ディアス・jr]、字は演西という、ポルトガルのイエズス會士がいた。1610年に中國へ渡り、1611年、費奇規 [Gaspar Ferreira, ガスパル・フェレイラ] と共に、布教のため韶州を訪れた。1616年には南京での教難により、マカオに追放された。1621年、北京に派遣され、1623年には中國教區の副區長に任命された。1626年、黎寧石 [Pedro Ribeiro (葡) ペドロ・リベイロ] と共に南京に滞在したが、1627年に追放されて松江へ逃れ、さらに杭州へ逃れた頃には寧波の教務の職に昇進していた。1634年には南昌に、1638年には福州に滞在し、1639年、寧波に戻った。その後再び福州へ戻り、1659年、杭州において没した。遺作には『聖經直解』、『天主聖教十誡直詮』二卷、『代疑編』一卷、『景教碑詮』一卷、『聖若瑟行實』一卷、『聖若瑟禱文』、『天神禱文』、『輕世全書』、『默想書考』、『避罪指南』一卷、『天問畧』一卷などがある²⁰⁾。伏若望の卒年から見て、『空際格致』の刊刻時期は、1624年より後、1638年より前と考えられる。さらに高一志と畢方濟、伏若望、陽瑪諾が同じ土地に居た時期を比べると、おおよそ南京の教難およびマカオへの追放時に翻譯したか、あるいはその

時期には既に翻譯を開始していたのだろう。

もう一度『空際格致』の版本の状況を述べてみよう。早稲田大學圖書館貴重書庫所藏の刻本は、序跋、牌記など、刊刻年月を確定できる直接の證據はないが、字體（横輕豎重の長宋體）、版式（白口及び卷首に列せられた訂閱人等）、行款（每半葉九行、每行二十字）及び料紙（微黃）などを総合すると、みな晚明刻本の基本的な特徴と合致する²¹⁾。そして、最も重要な特徴は避諱である。

一例を挙げると、卷下「雷之奇驗」10葉a～bでは雷擊について「大率物之剛硬者毀、柔虛者存」〔大率、物の剛硬なる者は毀つ、柔虚なる者は存す〕と述べ、雷が酒桶に落ちる例を挙げて「一雷下時、或值酒在桶、焚燼其桶、而凝結其酒、不使渙泄」〔一雷下る時、或いは酒の桶に在るに値えば、其の桶を焚燼するも、其の酒をして凝結せしめ、渙泄せしめず〕とするが、この理由を「雷值衆液、不能透入其内而化乾之、亦可結其外面、致成厚皮、使簡持内液、不至泄散」〔雷は衆くの液に値えば、其の内に透入し化して之を乾かす能はざるも、亦た其の外面を結ぶべし、致して厚皮を成し、内液をして簡持せしめ、泄散するに至らしめず〕と説明している。この「簡持内液」の「簡」字は、本来ならば封緘の意の「檢」字とするべきだが、崇禎帝朱由檢の諱を避けて改めている。これを『四庫存目叢書』所收の南京圖書館藏清鈔本と對校すると、抄寫した人物は避諱だとわからなかったか、あるいは音が近いため誤ったのか、清鈔本では「簡持」を「堅持」と改めている。さらに卷下40葉aに「月既主乎潮、則江河胡不發潮乎」〔月は既に潮を主らば、則ち江河は胡ぞ潮を發せざるや〕の句があるが、ここでは「胡」字を避忌していないのに對して、上述の清鈔本は「胡」を「何」としている。これらの状況からすると、早稲田大學藏本は崇禎刻本であり、1628～1638年の間に刻されたと見るべきである。

二

『中國古籍善本書目』などの關連する書目を調査したところ、『空際格致』の崇禎刻本は中國國內に現存せず、日本の全國漢籍データベースにも見られない。現存する通行本は、主に上述の『四庫存目叢書』「子部」第九十三册所收の南京圖書館藏清鈔本と、民國上海聚珍仿宋印書局鉛印本『空際格致』二卷附『地震解』一卷（對照したところ、本テキストは清鈔本の排印）である。その他の

版本には、初歩的な検索調査の結果として、濟寧李氏礪墨亭叢書六十三種二百七卷（清李冬涵編 稿本）所收の『空際格致』二卷が中山大學圖書館に所藏されている（調査や他テキストとの対照はまだ行っていない）。また、鄞縣張壽鏞『四明叢書』所收の『空際格致』二卷は清の韓雲が校訂したもので、民國三十三年（1944）の線裝一冊本（『中國叢書綜錄』未著録）がある。このほか、吳相湘『天主教東傳文獻三編』（臺灣學生書局、1984年10月版）は『空際格致』の刻本を一部収録している。これは、バチカンのローマ教皇廳圖書館藏本に據ったものだが、字體、行款、版式などを比較してみたところ、早大圖書館所藏本と同一の版刻である。

以上の調査結果から早大圖書館所藏本の價值を述べると、第一點は、校勘價值があり、底本としてよいという點が挙げられる。『四庫存目叢書』所收の南京圖書館藏清鈔本は目次や附圖が無く、訂閱者の情報が完全ではない上、脫字や訛字、顛倒、衍文などが非常に多い。

早大圖書館所藏の明刻本により校勘したところ、清鈔本の脫字は次のようになる。

清鈔本卷上の4葉a「兩敵體以相反之性、不能相近、以生成物」は、「相近」字の前に「相適」二字が脫落している。

8葉a「山峙谷水乃流而盈科」は、「谷」字の後の「降」字が脫落している。

9葉b「此徑一圍三、應作二十二之七爲准」は、「徑一圍三」の下の「法」字が脫落している。

11葉a～b「蓋趨於重物之本位、謂之真上」は、明刻本では「蓋趨於重物之本位、謂之真下。趨於輕物之本位謂之真上」となっており、清鈔本には「謂之真下趨於輕物之本位」の十一字がない。これでは文意が通じないため、上海聚珍仿宋印書局鉛印本は、「上」を「下」と改めている。

12葉a「先日動類、揔有二、曰純曰雜。體有二種」は、「體」字の前の「純」字が脫落している。

15葉a「則依徑一圍三法、必有二萬八千六百三十六里三十六丈之厚矣」は、明刻本ではこの下に「周天約有三百六十度、每度定取地面二百五十里、揔筭必得其數。然天上每度定取地面二百五十里、又何驗之。凡從南北行二百五十里、必見北極昂一度、南極低一度、北南既然、東西亦皆然、以天地皆圓、故也」と

いう雙行の小字注があるが、清鈔本にはない。

16 葉 a 「其甚者、人必居山内洞窟以避之」は「甚」字の下の「熱」字が脱落している。

17 葉 b 「必驗之於天」は「驗」字の下の「地」字が脱落している。

23 葉 a 「諸國所紀」は、明刻本には「諸國典籍所記」とあり「典籍」二字が脱落している。

28 葉 a 「而就地之體以成球矣」は、明刻本では下に雙行小字注で「諸他關水之論、見下卷屬水象之篇」とあるが、清鈔本にはない。

29 葉 a 「夫外目所不及者、有理之内目可及也」は、明刻本ではこの下に「如上篇已詳之矣」があるが、清鈔本にはない。

32 葉 a 「無不帶原而傳于空中之气也」は、「原」字の下の「情」字が脱落している。

34 葉 b 「下火係居本所之外」は、明刻本ではこの下にある「恆須薪料以養其燃、故其體有清濁輕重之不同」の句がない。

37 葉 a 「非得新气而逐散之」は、「新气」の下の「時入」二字が脱落している。

清鈔本卷下の 1 葉 b 「其象甚繁而大且顯者、約十有四。爲火燄、爲火烽、爲狂火、爲羊躍……」は「羊躍」の下の「火」字が脱落している。

5 葉 a 「及其所至、而不分其由行之漸」は、「漸」字の下の「次」字が脱落している。

5 葉 b 「忽爆出而有光」には、明刻本でこの下に續く「有聲如銃爆然」の句がない。

同葉「乾熱以漸出、但殷雷而已」は、清鈔本では「漸」字の下にある「透」字が脱落している。また、清鈔本にはこの下に雙行小字注で「殷雷、聲之小者」とあるが、明刻本では「殷雷、聲之小也、與轟雷相似」となっており、ここにも抄漏がある。

6 葉 a 「凡二大厚相擊、亦可成雷」は「厚」字の下の「雲」字が脱落している。

16 葉 a 「若係空際如彗孛、則與彗孛之運必同、無大異也」は「運」字の下の「動」字が脱落している。

17 葉 b 「凡光照空際之體甚厚、其所生必深而黑」は「生」字の下の「色」字が脱落している。

19 葉 a 「又使一方併有二可虹之雲」は「可」字の下の「成」字が脱落している。

25 葉 a 「即依性理正論、先曰風本質乃地所發乾熱之氣、有多端」は「多端」の下の「可證」二字が脱落している。

35 葉 b 「日照土水、恆攝其濕氣、或承所攝之力大、即升高結而爲中域之象」は「結」字の下の「雲之類」三字が脱落している。

38 葉 b 「然是諸說皆無實」は「實」字の下の「據」字が脱落している。

39 葉 b 「然此動在滄海尙微、而地中海之中、更大于墨阿納湖」は「尙微」後の「而地中海更大」の句が脱落しており、また「墨阿納湖」を明刻本は「墨阿的湖」に作っている（これについては南懷仁『坤輿圖說』卷下「歐邏巴州」を参照）。

40 葉 a 「即欲究其所以然」は、明刻本ではこの下に續く「須另後論」の句がない。

41 葉 a 「夫潮長退之異勢、與日旋轉之勢」は「旋轉之勢」下の「無關」二字が脱落している。

43 葉 b 「惟海所以通泉井之隱渠、或寬而直、或窄而曲、故難通及而遲」は「或寬而直」下に「故易通及而速」の句がない。

この他、清鈔本には判別し難いために缺字となる文字があるが、明刻本のほうは完全である。例えば清鈔本卷上の 30 葉 b 「假如上域□熱者」の缺字は、明刻本には「太」とある。

卷下の 11 葉 a 「乃以日□濕、氣之乾、猶可凝結不流」の缺字は、明刻本には「之」とあり、「濕」を明刻本は「焜」とする。

12 葉 b 「而彗孛高□山頂尤遠」の缺字は、明刻本には「去」とある。

20 葉 b 「而接日光愈□」の缺字は、明刻本には「淺」とある。

36 葉 a 「霜以所□之冷氣」の缺字は、明刻本には「寒」とある。

清鈔本における文字の誤りは以下の通りである。

清鈔本卷上の 2 葉 b 「古有于四元行中、正立一行以爲萬物母者」の「正」は、明刻本には「止」とある（清鈔本は「止」を誤って「正」に抄寫する個所が非常に多

い)。

4 葉 b 「故復需气水二行又居兩體之間而調和之」の「又」は、明刻本には「入」とある。

7 葉 a 「三曰見訊、蓋四行之序、目前易試也」の「訊」は、明刻本には「試」とある。

13 葉 b 「故上不得着水、水不得着火、火不得着土」の「上」は、明刻本には「土」とある (清鈔本は「土」を誤って「上」とする個所も非常に多い)。

15 葉 a 「又加二州、曰亞墨利加、曰墨加竦尼加、以成五大洲矣」の「竦」は、明刻本には「辣」とある (墨加竦尼加 (Magellanica) [マゼラニカ] は 15～18 世紀のヨーロッパ地圖に示されている未知の南方大陸のことであり、マゼランによって命名されたのかもしれない。艾儒畧 [Giulio Aleni、(伊) ジュリオ・アレニ] 『職方外紀』卷四では「墨瓦蠟尼加」[メガラニカ] と譯している)。

15 葉 b 「古者多疑赤道及北南二極下之地皆無人居、以甚苦甚寒故也」の「苦」は、明刻本には「暑」とある。

16 葉 a 「由是可知赤道不及其左右一帶無不可居也」の「不」は、明刻本には「下」とある。

20 葉 b ～ 21 葉 a 「曰綫本曲也、其見直者、惟遂視之故」の「遂」は、明刻本には「遠」とある。

22 葉 a 「天下域之近且輕浮者、胡能動天地之遠且重實者乎」の「天」は、明刻本ではすべて「夫」となっている (清鈔本は「夫」を誤って「天」に抄寫する個所も非常に多い)。

同葉「或曰地有深根、下至無窮。夫地圓而人環居、即屬有根、何致無窮之根乎」、「即屬有根」の「根」は、明刻本には「限」とある。

24 葉 a 「或又問曰。地之德、不外乾冷二情、草木及生活之物、宜貴于地矣、何反由地生乎」の「及」は、明刻本には「乃」とある。

26 葉 a 「或問曰。地既高于海、乃巡濱而漂海者何視池如卑下乎」の「池」は、明刻本には「地」とある。

32 葉 b 「此論火者、上已概舉、此宜畧詳之」の「火者」は、明刻本には「大旨」とある。

38 葉 b 「由是亦知借他負形之物、于火內必不能永存」の「借」は、明刻本に

は「諸」とある。

清鈔本卷下の3葉b「燥气不拘、下厚且濁、上薄且清」の「拘」は、明刻本には「均」とある。

4葉a「雙者是气既分爲二、乃消散之先」の「先」は、明刻本には「兆」とある。

4葉b「或問曰。二種流星行時、似遺明跡、或一大線、或一火路」の「或一大線」は、明刻本では「成一火線」となっている（清鈔本は「或」と「成」、「火」と「大」と誤って抄する個所も多い）。

5葉a「地出之气、不甚熱燥察厚」の「察」は、明刻本には「密」とある。

6葉a「然雷聲亦有不必光燃而後鳴者」の「光」は、明刻本には「先」とある。

6葉b「又知轟雲約有二種」の「雲」は、明刻本には「雷」とある。

9葉b～10葉a「又如雷之種不一、其火有名而甚異者、大約有三」の「如」は、明刻本には「知」とあり、「火」は明刻本に「大」とある。

13葉b「或云其甚短者不下七日、其九者不過八旬」の「九」は、明刻本には「久」とある。

15葉a「此中謂天河、西國謂气道、因其色白如乳也」の「气」は、明刻本には「乳」とある（「乳道」は西歐言語における「milky way」を指す）。

17葉b「又其所以顯之處、大概在空際、其橫者即光也、其作者即太陽與射光之物也、其爲者即宇宙之美、萬物之全也」の「橫」は、明刻本には「模」とある。

19葉b「又曰鵠向日、其頭亦發多色」の「曰」は、明刻本には「白」とあり、「頭」は明刻本に「頸」とある。

20葉a「盖雲之上由畧薄」の「由」は、明刻本には「面」とある。

21葉b「盖其外稀薄、能受星光、故見淺。而内密厚、未能深受、故其深與窟穴無異也」の「故其深」の「其」は、明刻本には「見」とある。

23葉a「其雲間日之面爲薄、故深受日光及像。其背日之面爲厚、故所受光與像不能通透」の「間」は、明刻本には「向」とある。

26葉a「盖平分地半圈爲八方」の「半」は、明刻本には「平」とある。

26葉a～b「又因所經之地、而風必滯其勢、如北風西風多經雪山乾地、故寒

且乾。南風東風多從海出、又經赤道下之熱地、故熱且濕也」の「滯」は、明刻本には「帶」とある。

27 葉 a 「吾毘邏巴諸國以北風爲尙、以南風爲虐。利末亞諸國反是」の「毘」は、明刻本には「歐」とあり、「末」は明刻本に「未」とある（利瑪竇『坤輿萬國全圖』に記載された五大洲はヨーロッパ、利末亞〔リビア〕、南、北亞墨利加〔アメリカ〕、墨瓦蠟泥加〔メガラニカ〕である）。

28 葉 b 「一週中域之寒、即氣所帶之熱、而反元冷之情」の「中」は、明刻本には「本」とあり、「氣」は明刻本に「棄」とある。

33 葉 b 「雨落時、又被冰炎氣透圍逼迫、使雨內之冷氣更加甚至凝凍而成冰雹也」の「冰炎氣」の「冰」は、明刻本には「外」とあり、「透」は明刻本に「遶」とある。

35 葉 b 「然人航海者、近南北極下、每見海水止而不能通」の「水」は、明刻本には「冰」とある（34 葉 a 「使結水矣」の「水」は、明刻本には「冰」とある）。

36 葉 a 「蓋露之所以帶濕氣潤澤而滋育者、如旱時之乾雨」の「乾」は、明刻本には「甘」とある。

39 葉 b 「又云北地多含大江、此乃入海、必使其溫而流于南之低也」の「溫」は、明刻本には「溢」とある。

40 葉 b 「近岸見大、離岸途遠、潮愈微矣」の「途」は、明刻本には「逾」とある。

42 葉 a 「蓋月之本動、從西而東、一日約行十三度。從宗動天之帶動、自東而西、必欲一日零四刻、方可以補其所運行之路而全一週也」の「運」は、明刻本には「逆」とある。

清鈔本における文字の顛倒は以下の通りである。

清鈔本卷上の 38 葉 a 「然後學多非之、云生萬物不能存于火內、何也」の「生萬物不能」は、明刻本には「生物萬不能」とある。

卷下の 13 葉 b 「至言彗孛所見限期、未易可定」の「未易可定」は、明刻本には「未可易定」とある。

26 葉 a 「蓋平分地半圈、爲八分、又再分、爲三十二、爲十六、又再分」は、明刻本には「蓋平分地平圈、爲八分。又再分、爲十六。又再分、爲三十二」と

ある。

27 葉 a 「西來航海者、北至赤道下、見一黒雲、必收其帆、以備不虞」の「見一黒雲」は、明刻本には「一見黒雲」とあり、「北」は明刻本に「凡」とある。

清鈔本における衍文は以下の通りである。

清鈔本巻下の 4 葉 b 「謂此火星從此跳彼不可也」は、明刻本では最初の「此」字がない。

7 葉 b 「雷必先、電必後、乃人見電在先、而反聞雷聲在後者、何也。目視捷、耳聞遲」、は、明刻本では「何也」がない。

22 葉 b 「盖气之熱者消化其气之濕者」は、明刻本では「濕者」の前の「气之」二字がない。

23 葉 a 「又清水亦可取驗、其在泉或有在盂、一受日照、無不生日像」は、明刻本では「在盂」の前の「有」字がない。

27 葉 a 「乾熱气横積于空」は、明刻本では「横」字がない。

以上は大まかに校讀した結果であるが、これらのほかにも誤りを校勘すべき箇所は多い。崇禎刻本は著者および友人の生前に上梓されており、著述の本来の姿に一層近い点からすれば、當然、後の鈔本より優れていると言える。しかし、明刻本自体にも文字の誤りは存在している。

三

現在、バチカンのローマ教皇廳圖書館が所藏する崇禎刻本が影印されて広く見られるため、これと同一の早大圖書館所藏『空際格致』の評価、あるいは校勘價値は、ローマ教皇廳圖書館藏本と何ら変わらない。しかし、歴史的遺物として、この二つのテキストは、それぞれ多岐に渡る價値を持っている。早大圖書館藏本について言えば、このテキストの所藏が次々に移り変わったことは、西方の宗教や「西歐文明の漢譯書籍」の東アジア社會における傳播や受容、そして中、日、朝三國間の文化交流の経路と過程を物語り、同時にこれらを再構成する手がかりとなるものであり、獨特の價値をもつことは疑いない。

すでに述べた通り、早大圖書館藏本は原裝ではなく朝鮮裝である。これは、

少なくとも早大圖書館藏本が朝鮮に傳わり、その後で日本に傳來したことを意味している。周知の如く、アジア社會で最初にイエズス會士と接觸したのは日本である (1549年8月、ザビエルが鹿兒島に渡來した)。しかし、キリスト教や洋學の初めての漢譯が、晩明から清初にかけての中國で相當な規模になっていたころ、日本では、豊臣秀吉のころより始まり江戸幕府が行った禁教政策によって、イエズス會士が日本で布教することや關連する知識を伝えることは困難になっていた。

大庭脩などの研究によると、寛永七年 (1630) 中國から長崎に運ばれたキリスト教の書籍が禁書となり、これが禁書の濫觴となった。近藤正齊『好書故事』卷七四は、『天學初函』の條に三十二種のキリスト教の禁書書目を収録している。この禁書書目は書名、編名の分類の歸屬や書冊の統計が不正確かもしれないが、一般的には信賴できると考えられている²²⁾。この禁書書目には高一志の『教要解畧』も含まれている。

貞享二年 (1685)、五十五番船から輸入された傳汎際『寰有詮』六卷は、檢分後に燒却され、この後、書籍檢分の制度は日増しに厳しくなった。『御制禁書籍譯書』には禁書が新たに追加され、その内容がキリスト教と關わりがなくても、西洋の事情を記していれば取り締まられた²³⁾。こうした情勢は享保五年 (1720) まで續き、その後緩和されていった (この年、第八代將軍吉宗の命により、直接キリスト教義を宣傳するものを除き、その他の書籍に對する禁令は緩和された)。

漢譯された洋學書の一部は確かにこの政令により解禁されたが、引き續き禁じられた書物もあった。例えば、『職方外紀』は寛政七年 (1795) に再び禁書とされた²⁴⁾。明和八年 (1771) 京都書商會が編纂した『禁書目錄』の『國禁耶穌書』に列擧された三十六部の禁書によると、上述の寛永七年の禁書目よりも増加するばかりであった²⁵⁾。このうち高一志の著書は、『教要解畧』のほか『十慰』も宣教に關する書として、自ずから禁書の範圍に含まれていた。

以上の狀況からすると、『空際格致』のように漢譯された洋學書であっても、日本においてキリスト教の書物に對する禁令が日増しに厳しくなっていた時期 (おおよそ明の崇禎から清の康熙に至る九十年間) に流入する可能性があったとは考え難い。その後の情勢も樂觀を許さなかったが、蘭學が發展するにつれ

て、締め付けはやや緩んでいったようである。こうした書籍が制限を受けず流通するようになるのは、恐らく、キリスト教関係書が正式に解禁された幕末以降であろう。

日本と同じく鎖國政策をとっていた朝鮮は、言わば最も遅くに西洋の宣教師の勢力と直接接觸した。ただし、朝鮮は十七～十八世紀にかけて「朝鮮燕行使」ルート、すなわち明、清朝に派遣した使節を通じて、北京で意識的に宣教師たちと交流し、筆談を行い、贈物を受けたり書肆で探し求めたりして、漢譯された洋學書や圖、西洋の様々な器具を大量に持ち歸った。

朝鮮の士人の中には、こうしたものに強い排斥の意を示す者もいたが、もの珍しい流行の文化として、朝野では瞬く間に廣汎な關心を集めた。安鼎福が「西洋の書は宣祖の末年より傳わり、名卿、碩儒の一も讀まざるは無く、諸子、道佛の書と共に書室の玩と視爲されり」²⁶⁾と述べるのは、決して誇張ではない。そうした中で、新派の儒學者や成均館の儒生は、おそらく西洋書を読み、收藏する主力であった。そしてこのことは、早大圖書館所藏本『空際格致』が朝鮮装である背景を推測する手がかりとなり得るだろう。早大圖書館所藏本『空際格致』の版本については既に述べたが、この版本には、上、下巻の本文首页の右下角に小さな方形の陽文印「蕉霽亭」がある。もしかすると、これは當時の朝鮮士人が收藏する際に用いた別號印²⁷⁾かもしれない。

この期間に朝鮮へと流入した漢譯洋學書は、目下のところ、完全な書誌學的整理が行われてはいない。しかし、韓國の研究者による不完全な統計によると、これらの書籍が流布したおおよその状況を概観することができる²⁸⁾。

興味深いのは、多くのヨーロッパ宣教師による著作の漢譯書の中で、高一志の著述が最も多く朝鮮に流入したことであり、『達道紀言』、『童幼教育』、『斐錄答彙』、『警學警語』、『勵學古言』、『脩身西學』、『齊家西學』、『天主聖教四末論』、『寰宇始末』の九種を數える。これらは基本的に全て正祖六年(1782)四月、江華府冊庫より奎章閣に移された書籍である。このことは、これらの書籍が正祖六年四月より前には朝鮮に流入していたことを示している。正祖十五年(1792)、これらの中國から流入した西歐文明の漢譯書籍は他のキリスト教の書籍と共に燒却された²⁹⁾。このことも朝鮮装の『空際格致』が朝鮮に流入した時期を限定する参考になるかもしれない。

一方では、朝鮮装の『空際格致』自體によって、すでに朝鮮に流入していた漢譯洋學書に關する狀況を補うこともできる。例えば裴文が記しているように、正祖十年(1786)、朝鮮は中國から圖書を購入することを嚴禁しており、特にキリスト教の書籍や野史、雜記の購入を嚴しく禁じていた。このことは、正祖十年以後、朝鮮が中國から書籍を輸入することはなかつたことを意味している³⁰⁾。そうなると、『空際格致』のような書籍が再び朝鮮に流入する機會はほとんどなかつたことになる。

また、先に述べたように、早大圖書館藏『空際格致』の上、下兩冊の裏表紙にある「和久正辰」という半陽半陰の圓印は、この『空際格致』が和久氏に所藏されていたことを示している。

和久正辰(1852～1934)は明治時代の理科學者、教育學者である。若いころ慶應義塾に入學して英語を學び、卒業後は、東京本郷管相義塾の英語教授、愛知縣立名古屋師範學校附屬小學校の教頭、宮城縣師範學校の校長兼教授、東京府立師範學校の校長兼教授、淨土宗大學林の教頭兼教授、東京府教育會附屬教員傳習所の主幹などを歴任した。著書や譯書は多く、J.S. ミル [John Stuart Mill] 著『收稅要論』(上、東京、土屋、松井忠兵衛。下、東京、和泉屋、牧野善兵衛、1879・7)の譯、ゼームス・カレー [James Carey] 著『加氏初等教育論』(上、中、下、東京、牧野書房、1885・11～1886・4) やジョセフ・エマーソン・ウースター [Joseph Emerson Worcester] 著『西史攬要』(1～8卷、出版者 松井忠兵衛等、1886)の譯述があり、『教育學講義』(1～12卷、牧野書房、1886～1887)を著したほか、『理科教授法』(上、下、牧野書店、1887)の編譯、ゼームス・サレー [James Sully] 著『應用心理學』(上、下、牧野書房、1888・10)の譯、『初等心理學』(牧野書房、1890)、『論理學教授書：歸納法』(東京學館獨習部、1892)、『教育學教授書』(東京學館獨脩部、1894)、『心理學』(東京學館獨脩部、1895)及び『教育史講義』(尋常師範學科講義錄、明治講學會)などの著作がある³¹⁾。

これらの著書や譯書から明らかなように、和久正辰は、日本が開國し急激に世界の情勢に目を見開く雰圍氣のなかで育ってきた新時代の知識人であり、なおかつ日本が急速に近代化していく過程の中にあつて貢獻した人物である。古代ギリシャの著名な哲學家が論じた自然科學の漢譯書である高一志の『空際格致』がこのように氣風が大きく變化した時代にあつて、和久正辰のような學者

に所藏されたことは、實に象徴的な意義がある。

これまで述べてきたように、日本や朝鮮が初期のヨーロッパ宣教師及び漢譯されたキリスト教や洋學の書籍を排斥し、あるいは受容したという紆餘曲折の過程の交錯を反映する時間の流れは、早大圖書館所藏の『空際格致』がたどった大體の経過を判断する大きな手がかりとなる。それと同時に、この流れからは、近世における初期の東西の文化交流とその産物がたどった歴史的運命を垣間見ることもしもできる。もし崇禎刻本『空際格致』の考察範圍を清朝における流傳の情況にまで廣げたならば、東アジア社會全體における、當時の西洋宣教師およびキリスト教や洋學の漢譯書の排斥や受容の過程を、より完全な形で明らかにすることができるだろう。

『空際格致』は崇禎年間に刊行された後、清初においても廣く流布した。この例としては、南懷仁が康熙十一年(1672)に刊刻した『坤輿圖說』が挙げられる。『坤輿圖說』卷上の卷首には編撰の緣起が述べられている。この中では編纂意圖について、次のように記されている。

『坤輿圖說』者、乃論全地相聯貫合之大端也。如地形、地震、山嶽、海潮、海動、江河、人物、風俗、各方生産、皆同學西士利瑪竇、艾儒畧、高一志、熊三拔諸子通曉天地經緯理者、昔經詳論、其書如『空際格致』、『職方外紀』、『表度說』等、已行世久矣。今撮其簡畧、多加後賢之新論、以發明先賢所未發大地之眞理。〔『坤輿圖說』は、乃ち全地の相關貫合を論ずるの大端なり。地形、地震、山嶽、海潮、海動、江河、人物、風俗、各方の生産の如きは、皆な同學の西士利瑪竇、艾儒畧、高一志、熊三拔の諸子、天地經緯の理に通曉する者、昔詳論するを経て、其の書の『空際格致』、『職方外紀』、『表度說』等の如きは、已に世に行われること久し。今、その簡畧を撮り、多く後賢の新論を加え、以て先賢の未だ發せざる所の眞理を發明するなり。〕

『坤輿圖說』の卷上は、『空際格致』から多くを引用している(大まかに比較したところ、引用された文字のうち、崇禎刻本と『四庫存目叢書』所收清鈔本とで異なる個所は、全て崇禎刻本と同じであった。これは當然の事である)。もし『空際格致』が「同學西士(同輩のヨーロッパ宣教師)」によって參照されたのだとしても、

これは『空際格致』が廣く傳播していたことを代表することにはならない。だが、方豪が発見した「康熙二十七年（1688）王宏翰が編纂した『醫學原始』四卷の第二卷は、ほぼ全て『空際格致』を採録している」³²⁾ことは、『空際格致』がキリスト教を信仰する中國の人士に與えた影響をよく示している。

しかしながら、正確に言えば、卷二の『四元行論』と『四行變化見象論』の二節は『空際格致』から多く摘録され、同じく『空際格致』の卷上末に附された『四行情圖』（『四庫存目叢書』所收の清鈔本にはこの圖が採録されていない）を採録しているが、『醫學原始』四卷の第二卷には、高一志の『空際格致』以外にも艾儒畧『性學辨述』や湯若望『主制群徵』の説が採られている。

乾隆年間後期に編纂された『四庫全書』の中で、『空際格致』は子部「雜家類」の存目に収録されているだけだが、ここに著録されている「直隸總督采進本」は、崇禎刻本に違いない。嵇璜の『續通志』卷一百六十「藝文畧」（文淵閣四庫全書本）には「『空際格致』二卷」とあるが、これは「四庫全書存目」の著録に據っている。趙學敏が乾隆三十年（1765）に完成させた『本草綱目拾遺』（同治十年吉心堂刻本）の卷二は『空際格致』を引用した「硫磺」の條があり、『空際格致』がなお流傳していたことを示している。しかし、四庫館臣がこうしたキリスト教や洋學の譯著を存目に著録したことは、それ自體が既に『空際格致』に對する評價を明らかに示しており、四庫館臣により撰述された「提要」も、後世に大きな影響を與えた。そして、この背景には、雍正、乾隆の間に度々起きた「教難」があり、朝廷による禁教政策が日増しに厳しくなっていたことを明確に示している。

この後、高一志の『空際格致』は容易には見ることができなくなったが、自然科学や機械製造の専門知識に精通していた鄭復光は、道光二十二年（1842）に撰した『費隱與知錄』（道光活字本）の中の「氣薄氣餘論火同異」〔陰氣、陽氣の偏りによる「火病」の異同を論じる〕という一節において、『空際格致』にある氣薄因熱生火の説〔陰氣が偏ると「火病」に屬する病を生じる説〕と『〔黃帝〕內經』の「氣有餘便是火」の説〔陽氣が偏ると「火病」に屬する病を生じる説〕とを比較し、高氏の説は「専ら冷熱の體質を述べた」もので、二説は「相反するに似たるも實は悖らず」という見解を示している。

『費隱與知錄』の記述は『空際格致』卷上にある「下火」の一節に關連する

論述を修正して記しているため、どの版本に依據したかわかりにくい。しかし『八千卷樓書目』卷十二子部の「雜家類」が著録する『空際格致』二卷のテキストは、その下に附された注に「抄本」とあることから南京圖書館所藏の清鈔本に違いない。『八千卷樓書目』通行本は1923年の丁仁仿宋聚珍排印本であり、卷首にある孫峻の光緒己亥（1899）叙には、丁丙が「書目二十卷を編し、和甫孝廉に命じて之を録せしむ」とある。また、羅架の記した同年の叙には、丁丙が「哲嗣の和甫孝廉に命じて、書目二十卷を編纂せしむ」とあることから、當然、その成書時期は叙文の年代よりもさらに早くなる。叙にある「和甫」とは丁立中のことである。丁立中は同治三年（1864）の舉人であり、同治九年（1870）には靖江教諭に任ぜられたので、『八千卷樓書目』が編纂されたのは、1864～1870年の間であろう。

この推測が正しければ、これより以前に『空際格致』の崇禎刻本を探し求めることは難しかったはずである。民國の初めになり時代が大きく變化するのに従って、明、清のキリスト教や洋學の譯著について再び整理と研究とが行われ始めたが、既に述べたように、上海聚珍仿宋印書局の鉛印本『空際格致』二卷附『地震解』一卷は清鈔本に據って印刷されており、實際に、崇禎刻本が遅くとも清末の中國には存在していなかったことは一層明らかである。およそこの廻り合せは、歴史情勢のめまぐるしい變化を今に傳えており、さらには早大圖書館所藏の崇禎刻本が、バチカンのローマ教皇廳圖書館の同版藏本とともに極めて貴重な書物であることを教えてくれるのである。

注

この翻譯では、讀者の便を考慮し、原文にはない人物の歐米語表記や日本名、また漢語原文の日本語解釋等を附加した個所がある。これらについて、（ ）内の内容は著者による補足であり、〔 〕内の内容は譯者によるものである。（譯者）

- 1) 生平及び著述について、詳しくは（佛）費賴之『在華耶穌會士列傳及書目』（馮承鈞譯、中華書局1995年版）第88～97頁を参照。南京の教難によって王豐肅等が廣東に送還されたことは『萬曆野獲編』卷三十「大西洋」、『國權』卷八十一「庚戌萬曆三十八年四月壬寅」の條、『明史』沈灌傳、『明史』外國傳七の「意大利亞」等に記載される。この審理を記した資料は『破邪集』卷一に見える。
- 2) 卷首には韓霖の順治四年の序がある。吳相湘編『天主教東傳文獻三編』第一冊（臺北、臺灣學生書局1984年版）所收。
- 3) 鍾鳴旦等編『徐家匯藏書樓明清天主教文獻』第三冊（臺北、方濟出版社1996年

版) 所收。

- 4) 高一志の著述に関する最近の考察には、金文兵「高一志譯著考畧」(『江南大學學報』2011年第2期)がある。この中では『終末之記甚利於精脩』は『四末論』刻本の一部の内容であることから、既に發表されている初期の文獻と對照すると、確定可能な著作は全十八種である、と推測している。
- 5) 徐宗澤『明清間耶穌會士譯著提要』(上海書店出版社2006年版)第32頁には崇禎二年(1629)武林刻本を著録する。また謝國楨『江浙訪書錄記』(北京、三聯書店1985年版)第68頁には「明崇禎二年、武林超性堂刻本」を著録する。金文兵『高一志譯著考畧』から引用。
- 6) 金文兵は黃一農が提供した『鐸書』刊刻人の倪光薦に関する資料から、この書の完成を1637年とする。さらに同様の著作である『西學齊家』、『西學治平』も1637年より後に完成されたかと推測している。同上掲書所引。
- 7) 卷首韓霖の序にある「西儒高則聖先生居東雍八年」の記述から、1632年に刻したものと考える研究者がいる。梅謙立〔Thierry Meynard〕『理論哲學和脩辭哲學的兩個不同對話模式』を参照。金文兵は共訂人の一人鄧玉函の卒年(1630)を考慮すると、完成時期は1630年より後とする。同上掲書所引。
- 8) 『在華耶穌會士列傳及書目』、第92～96頁。
- 9) 鍾鳴旦等編『法國國家圖書館明清天主教文獻』第四冊(臺北、利氏學社2009年版)所收。
- 10) 吳相湘編『天主教東傳文獻三編』第二冊所收。
- 11) 同上。
- 12) 中華書局1988年版、第155頁參照。
- 13) 『西籍漢譯之適應化』(Henri Bernard : Les Adaptations Chinoises d'ouvrages européens)、『華裔學志』第十卷(Monumenta Serica, Vol. X)。張子高、楊根「鴉片戰爭前西方化學傳入我國的情況」(『清華大學學報』1964年第2期)より轉載。
- 14) 『明清間耶穌會士譯著提要』卷四、第171頁。
- 15) 遼寧教育出版社1988版、第35頁。
- 16) Adrian Dudink、「The Zikawei (徐家匯) Collection in the Jesuit Theologate Library at Fujen 輔仁 University (Taiwan) : Background and Draft Catalogue」、『Sino-Western Cultural Relations Journal』XVIII、1996年。
- 17) 詳しくは黃一農『兩頭蛇：明末清初的第一代天主教徒』第六章「鼎革世變中的天主教徒韓霖」(上海古籍出版社2006年版)第229～237頁を參照。
- 18) 劉顯第等康熙『絳州志』卷二、第57頁。
- 19) 胡延光緒『絳縣志』卷八の第28頁。卷九の第11頁。卷十九の第6頁に見える。黃一農『兩頭蛇：明末清初的第一代天主教徒』第三章「‘泰西儒士’與中國士大夫的對話」、第103頁に見える。
- 20) それぞれ『在華耶穌會士列傳及書目』の第142～148、191～192、110～115頁を參照。
- 21) 復旦大學古籍整理研究所の本古籍所陳正宏教授より、該書が早稲田大學圖書館WEBページに公開されている畫像資料中にあるとの教示を受けた。特にここに謝意を表す。

[22] 中國文學研究 第三十八期

- 22) 詳しくは大庭脩『江戸時代中國典籍流播日本之研究』第四節「禁書與書籍検査」(威印平等譯、杭州大學出版社1998年版)第54～55頁を参照。
- 23) 詳しくは上掲書第56～60頁を参照。
- 24) 詳しくは上掲書第79頁を参照。
- 25) 詳しくは今田洋三『江戸の禁書』(吉川弘文館1987年版)第9～11頁を参照。
- 26) 『天學考』、『順庵集』卷十七、1900年刊木活字本。
- 27) 筆者は(韓)韓國學中央研究院「韓國歷代人物DB」〔한국역대인물 DB〕、ソウル大學奎章閣韓國學研究院「古典原文情報DB」〔고전원문정보 DB〕、韓國古典翻譯院「韓國古典綜合DB」〔한국고전종합 DB〕等のデータベースを検索したが、確かな資料を得られていない。
- 28) 詳しくは裴賢淑「17、18世紀傳來的天主教書籍」(楊雨蕾譯・載黃時監編『東西文化交流論譚』第二集、上海文藝出版社2001年)第419～450頁を参照。原文は韓國教會史研究所編『教會史研究』第3輯、1981年に掲載されている。統計によると、この際流入した朝鮮的漢譯キリスト教書籍は、關連する記載から調査可能なものが少なくとも六十四種ある。
- 29) 詳しくは上掲書中國語譯の第422～450頁を参照。
- 30) 『17、18世紀傳來的天主教書籍』、第451頁。
- 31) 生平はフリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』を参照、著譯書は(日)近代デジタルライブラリー、東京大學オンライン圖書館等のデータベースを検索した。關係する研究に「日本理科教育史(あるいは日本理科教授研究史)における和久正辰の位置」(佐々木洋、『鹿兒島大學教育學部研究紀要 人文社會科學編』、鹿兒島大學、1976年)第179～186頁がある。
- 32) 『中國天主教史人物傳』、第153頁。

(伴 俊典 譯)

* * *

作 者：陳廣宏

Author : Chen Guanghong

題 名：早稻田大學圖書館藏朝鮮版裝《空際格致》版本及其價值初探

Title : *Kong ji ge zhi* “空際格致” preserved in Waseda University Library

: an Early Edition and its Value

摘 要：本文初步鑒定早稻田大學圖書館所藏朝鮮版裝《空際格致》當爲崇禎刻本，因中國國內僅存清鈔本，其版本價值彌足珍貴。通過與清鈔本之間的粗略校勘，亦已可證優劣所在。又據此本大致遞藏情況，探察其在流傳過程中先後流入朝鮮與日本的獨特經歷，觀照近世第一波漢

早稻田大學圖書館藏『空際格致』について（陳）〔23〕

譯西教、西學著作在東亞各國曲折的受容歷程，揭示其體現早期東西文化交流歷史命運的文化價值。

關鍵詞：高一志 《空際格致》 早稻田大學圖書館藏本